

Japan Association of Synthetic Anthropology

総合人間学会

Newsletter 第 53 号 2025 年 8 月 26 日発行

発行人：古沢広祐

事務局：〒194-0204 東京都町田市常盤町 3758 桜美林大学 LA 学群 崇貞館 2F
教員ラウンジ気付 熊坂元大研究室

電 話：042-797-8138 (直通) E-mail: contact@synthetic-anthropology.org

【 目 次 】

I. 巻頭言	p. 1
II. 第 19 回大会シンポジウム・里山フォーラム・若手 WS 報告	p. 2
III. 2025 年度総会報告	p. 4
IV. 各種委員会等報告	p. 4
V. 理事会・運営委員会報告	p. 7
VI. 決算・予算資料など	p. 9
VII. 事務局からのお知らせ	p. 12

I. 巻頭言

ご挨拶

戦後 80 年を迎えた今、世界情勢は暗雲が立ち込め始めたかのような様相を呈しています。先が見通せない、厳しい時代に突入しつつあるのではと、不安を募らせている方も多いのではないのでしょうか。

繁栄をきわめるかに見えた人類という存在が、その存在の不気味さ、不安定さを、今さらながら思い知らされる今日この頃です。私たちは、あらためて総合人間学会の設立の意義と役割とは何だったのかを、問い直されているのではないのでしょうか？

本学会は、来年 2026 年に創設 20 周年を迎えます。学会設立に貢献された方々から、次世代への橋渡しとともに、学会活動の中間総括、そして新展開への見通しなどが課題となっております。

学会理事、役員は 2 年任期で務めておりますが、今年は第 10 期の後半となり改選時期にあたります。次年度からの第 11 期体制（改選）に引き継ぐために（理事の再任は可、会長は 2 期で退任）、今年は理事会（運営委員会含む）での議論を活発化させて、今後の方針作りに向けて注力したいと思います。

皆様の積極的なご参加とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第 9・10 期会長 古沢広祐

Ⅱ. 第19回大会シンポジウム・里山フォーラム・若手WS 実施者報告

1. シンポジウム報告

2025年5月31日に開催された大会シンポジウムは「人と自然の未来—里山からの展望、失意と希望の30年を超えて」というタイトルで実施された。ここ数年のシンポジウムでは、はじめに基調講演もしくは特別講演が行われたのちにシンポジストが共通のテーマで報告する形式がとられてきたが、第19回大会では登壇者全員がフラットな立場で異なる視点から報告を行った。報告者は上柿崇英氏（大阪公立大学、環境哲学・現代人間学）、井上浩朗氏（武蔵野大学非常勤講師、環境倫理学）、松村正治氏（NPO 法人よこはま里山研究所（NORA）、環境社会学）、吉永明弘氏（法政大学、環境倫理学）の4名、司会は熊坂元大（桜美林大学、環境倫理学）と竹中信介氏（道德科学研究所、比較文明学）が担当した。

最初の報告者である上柿氏の発表『『環境の時代』を振り返る——『生活』と『自治』への夢とこれから訪れるかもしれない世界について』は、1960-70年代から現代にいたる環境思想と環境保護運動の流れを概観し、現代社会の時代潮流の根底を問い直す報告だった。現代社会が人間と自然の関係について長期的な視点を欠いたまま技術開発による環境問題の解決を試みる方向へ流されていること、これは勝算が高いとは言えない賭けを行っていることになるのではないかと上柿氏の主張は、里山保全を含む環境保護活動の理念の大局的な反省を求めるものだった。

井上氏は第二報告「風土化としての里山論と『環境』概念の検討」で、自然環境の内在的価値という環境倫理学の古典的テーマを改めて検討し、価値や権利を客観的なものとして拡張してきた動物倫理学などに見られる潮流とは異なる、把握しきれないものとしての価値を環境に見出すことの重要性を提唱した。井上氏の議論は、第一報告で提示された長期的視点の欠如という問題に直接応答してはいないものの、そうした長期的視点にとって重要と思われる「把握できない」という自然に対する謙虚さの重要性を提示することで、上柿氏の問題提起への部分的応答だと言えよう。

「里山問題を考える環境社会学の方法論—誰にとって何が問題なのか」というタイトルが示す通り、松村氏の第三報告は思想系の学問とは異なる社会学の方法論を提示することを宣言し、上柿氏の報告に対して環境保全活動の低迷とは異なる里山保全の展開実践の様子を示した。司会である私自身、里山保全活動は下火になっているという先入観を抱いていたが、本報告では少なくとも一部の取り組みで参加者の広がりが見えることが説明され、大局的な困難とは別の視点から、現場実践からの模索の可能性が強調された。

第四報告者の吉永氏による「日本の環境倫理学における里山論と、都市の里山について」では、里山概念を参照しつつ、原生自然に比べて一段低いものとみなされやすい「都市の自然」が論じられた。管理の行き届いた自然として郊外や農村の里山が連想されがちだが、板橋サンシティ団地のように都市内部にも生活と密着した形で豊かな自然が形成・維持されていることが紹介された。環境保全には長期的な視点が必要であることを認めつつも、里山概念の多様な在り方の発見や再解釈の重要性が指摘された。

人と自然の関係を問うというテーマは、地球温暖化や異常気象が続くなか、学術的にも社会的関心という面でも時宜を得たものであり、登壇者同士の議論が白熱したのみならず、質疑応答では対面・オンライン両方の参加者から多数の質問が寄せられ、充実したシンポジウムとなった。登壇者の方々ははじめとする関係各位に心より御礼を申し上げる。

最後に反省点も簡単に述べておきたい。近年、本学会ではシンポジウムの責任者やテーマ、登壇者を決定するまでの時間的猶予が限られており、本大会では事務局長である私がなし崩し的に企画者となった。準備期間も短かったことは、シンポジウムで異なる視点からの議論のやり取りという形での盛り上がりにつながり、これはこれで肯定的な面もあったが、本来であればより周到に準備されるべきであったように思われる。企画者である私の力不足という面も大きかったとはいえ、シンポジウム企画のスケジュールについて改めて検討しておく必要があるだろう。

熊坂元大

2. 里山フォーラム実施者報告

大会2日目の午後、明治大学黒川農場本館2階教室にて「里山の未来を拓く」という副題の下で里山フォーラムを開催した。首都圏における市民参加型の里山保全活動が開始されて、30年あまりが経過し、活動のメンバーの減少と高齢化を憂う声もあるなかで、会場は「里山の未来を拓く」をテーマとしている。

1日目のシンポジウムと対照的に黒川農場周辺の多摩丘陵において現場の中心となって活動している話題提供者6人からの報告を得た。

コーディネーターの倉本からは、会場とした黒川農場の里山について、里山を雑木林という生態系としてではなく、農地や草地や農家も含む景観（生態系の複合体という生態学的単位）としてとらえ、構造、機能、変化という視点を持つことで、里山の未来が拓ける可能性があることが提起された。

岩崎泰永さん（明治大学黒川農場教授）からは「黒川農場の里山教育」アグリサイエンス講座（里山講座）、大学院共通総合講座などの黒川農場の里山教育が紹介された。

小泉寛明さん（明治大学黒川農場技能職員、黒川農場の責任者）からは職務に即して「黒川農場の里山管理」が紹介され、ナラ枯れの発生が転機となったことが報告された。

話題提供者の中でもっとも活動歴の長い吉武美保子さん（NP0 法人よこはま里山研究所理事、NP0 法人新治里山「わ」を広げる会事務局長）からは、フォーラムの対象とする地域を把握するために多摩・三浦丘陵群および神奈川県における里山保全活動の全体像が示された。多摩丘陵は良くも悪くも人口が多いことに特徴が認められる。

山田晋さん（東京農業大学、歴環研究者連絡会）からは「図師小野路歴史環境保全地域における里山管理と研究活動」として東京都でもっともすばらしい里山と言われる図師小野路歴史環境保全地域において、研究者の間の調整と東京都環境局と元地主の町田歴環管理組合の科学的な支援を行ってきた歴環研究者連絡会の活動が紹介された。

小林健人さん（NP0 法人フュージョン長池公園、長池公園園長）からは「長池公園と里山保全活動」として、さまざまな市民が地域の活動として里山にかかわるために行っている活動がいきいきとしたスライドによって示された。

田村薫さん（多摩グリーンボランティア森木会会長）からは「多摩グリーンボランティア森木会の紹介」として、多摩市における里山保全活動が形成している森木会というネットワークの活動を紹介してもらった。ボランティアとして活動している田村さん自身が身をもって活動の高齢化を否定していた。

質問カードを利用して質疑は活発に行われたものの、制度や技術についての質問が多い傾向が認められた。そのため、前日のシンポジストの松村正治さん（NP0 法人よこはま里山研究所理事長）が主催して、「里山フォーラムではいい足りなかった」と言うことから、吉武さん、小林さん、田村さんたちの「夜会」と題したフォーラムが直後に開催された。里山フォーラムは吉武、小林、田村の3名の里山コーディネーターと山田、岩崎、小泉の3名の里山にかかわる大学関係者の話題提供によって成り立っており、意識したわけではないものの総合的な構成になっていた。里山の市民活動としての側面と科学としての側面に対応したものであり、今回は取り上げなかった文化としての側面も加えて、総合化の歩みを進めていきたい。

倉本 宣

3. 若手WS 実施者報告

本年度の若手ワークショップでは、「＜当事者＞の学びづらさを考える：かつてみんな子どもだった」という企画を実施した。主な研究報告者は、長井岳氏（当事者研究）、藤阪希海氏（教育社会学）、江頭早紀氏（教育社会学・福祉社会学）であり、他にも特定質問者として桂悠介氏、コメンテーターとして朝倉景樹氏にご登壇いただいた。趣意報告・司会は佐藤竜人氏が担った。今年も複数回の準備会を重ねたうえで、若手の斬新な研究をワークショップに昇華することができた。

本企画では、学校等の教育システムを生きてきた研究者が、自ら経験した暴力や挫折などの生きづらさを、オートエスノグラフィー手法から繰り返し捉え直し、「学び」をめぐる「教師と生徒」「友人」等の関係を考察した。自分研究ともいわれるオートエスノグラフィーは、従来の社会科学研究で十分に取り組みなかった手法と思うが、本企画を通して、「人間がどのように学び、いかに生きるのか」を生々しく問う、経験的研究の新たな可能性が共有されたと思われる。

今後は、執筆者間での議論を重ねつつ、本ワークショップの成果を論文として仕上げていくつもりである。

本多俊貴

Ⅲ. 2025 年度総会報告

日時 2025 年 5 月 31 日 12 時～12 時 40 分 場所 明治大学生田キャンパス

始めに長谷場会員が議長に選任された。続いて古沢広祐会長から挨拶があった（冒頭、巻頭言参照）。

各種報告・審議事項など

1. 事務局活動報告（熊坂元大事務局長）

- ・ 本学会の状況について、会員数（177 名、うち一般会員 139 名、会費減額会員 32 名、会費免除会員 6 名）について報告があった。
- ・ またこれまでの理事会・運営委員会の活動日程の報告と、次年度の活動計画についての説明があり、後者について承認された（詳細は NL 末尾を参照）。

2. 2024 年度決算（審議事項）

- ・ 別紙資料のとおり承認された。

3. 2025 年度予算（審議事項）

- ・ 別紙資料のとおり承認された。

※ 各種委員会報告は総会の後に行われたものと合わせて、次のセクションに記載。

Ⅳ. 各種委員会等報告

1. 学会運営・会則等検討委員会（黒須三恵委員長）

I. 2024 年度活動報告

1. 委員会構成

委員長：黒須副会長、委員：古沢会長、熊坂事務局長、鈴木前事務局長、

助言者：長谷場副会長 鬼頭会員

2. 会則の改定と休会規定について検討し、前者（会則改定）を総会の審議事項とし了承された。

II. 2025 年度活動計画

1. 学会運営のあり方、とくに次年度の体制に向けて、役員改選の方法や段取りについて検討する。

2. 出版企画委員会（熊坂元大事務局長が代理）

I. 2024 年度活動報告

第1回編集会議	2024年8月29日	原稿第1次締切	2024年12月15日
第2回編集会議	2024年12月20日	原稿第2次締切	2025年1月15日
原稿相互チェック	2025/1/15~1/22	第3回編集会議	2025年1月22日
原稿最終締切	2025年1月31日	出版社へ原稿送付（1陣）	2025年2月17日
出版社へ原稿送付（2陣）	2025年3月7日	初校～四校・付き物	2025/4/5~5/9
印刷・納品	2025/5/12~5/22	発行日	2025年5月23日

II. 総合人間学 19 の出版について

- ・ 発行の報告。従来の 600 部（出版社 300、学会 300）から 400 部（学会管理）発行に変更。
- ・ 次年度以降の出版に関しては、要検討事項として、次年度にもちこされた。
- ・ 発送日程の連絡と遅延のお詫び。

3. KW 委員会（長谷場健委員長）

I. 2024 年度活動報告

- ・ KW 委員会は学会創立 20 周年（2026 年）にむけて「総合人間学 KW 集」（仮称）の作成を目指している。2019 年以来これまで月 1 回の委員会を今日まで 60 回以上開き、以下の 5 つの活動を企画しその成果を学会ホームページ（HP）に公開してきた（学会 HP 参照：http://synthetic-anthropology.org/?page_id=2688）。
- (1) 会員アンケートを基に「総合人間学 KW リスト」の作成。
- (2) 「DNA と人間」、「自己家畜化論」、「総合人間学」を KW として選出し、各 KW を複数の担者で相互討論を経て共同執筆する「総合人間学 KW 記述モデル」の作成の試み。
- (3) KW「対話」について複数の担当者が各自の視点から記述する共同執筆企画の試み。
- (4) 「会員への公募 KW」企画。
- (5) 委員会選出 KW の執筆依頼企画。
 1. 公募 KW 企画の第一期（2022 年 2 月～6 月）では「政治人」「人間の尊厳」「コミュニティ」「スピリチュアリティ」「共同性」「人間生物世界」「生物における生命」の 7 つの KW の応募があり、執筆者との応答を含む委員会審議を経て HP に掲載した。第二期公募（2022 年 9 月～）では、「暴力」「共通善」「人種主義」の応募があり、これら KW の審議はほぼ終了した。その他に「地方消滅」「DNA 二重らせん構造の発見」「ナラティブ」の応募申込もあったが、執筆者の都合によりまだ原稿提出には至っていない。本委員会の KW 原稿の審議は専門的な査読ではなく、公募案内に記載した総合人間学的視点並びに一般読者に分かりやすくという視点から行った。なお、第三期公募に関しては現在検討中である。
 2. 2024 年 6 月の本学会研究大会で、KW 委員会主催ワークショップを行い、これまでの委員会活動の報告の後、KW として「生命と人間の自律」「健康」の 2 つ KW を選出し総合人間学 KW としての記述の試みを提示した。それを踏まえて、総合人間学 KW の選択、記述の在り方、委員会活動の課題と展望を議論した（詳細はオンラインジャーナル第 19 号、報告に掲載）。
 3. 新たな企画として、委員会がこれまでの研究大会シンポジウムおよび作成した KW リストの中から総合人間学として重要と思われる KW を選出し、関係者に執筆を依頼した。それら KW は「言語の起源」「人新世」「生命の自律と人間」「生命倫理と総

合人間学」「対話」「脱成長」「脳科学と総合人間学」「ポストヒューマン」「学び」「優生思想」「宗教と総合人間学」「食と総合人間学」「総合知」「文化人類学」「哲学的人間学」「居場所」「資本主義」「戦争と平和」(仮設定)である。これらの多くは既に被依頼者から執筆の承諾が得られている。

II. 2025 年度活動計画

- ・ 今後は集められたこれらの KW の編集を行い、2026 年度の研究大会で「総合人間学 KW 集」(仮称)として紹介する予定である。
- ・ 「総合人間学」の KW 集作成は、その選出・構成の仕方および記述の在り方に関して様々な課題がありまだ道半ばである。本委員会は学会 20 周年に向けての KW 集作成のための臨時のアドホック委員会であるので、2025 年度で一旦活動を終了する予定であるが、今後の方針に関しては理事会に委ねたい。これまでの活動は総合人間学 KW を巡って、専門を超えて議論し視野を広げると共に認識を深め、人間を総合的に理解することを目指す総合人間学研究の場の一つになっていると思われる。今後は新たな体制で発展的に継続されることを期待する。

4. 若手委員会 (本多俊貴委員長)

I. 2024 年度活動報告

- ・ オンラインジャーナル第 18 巻 (2024) に、井上浩朗・横山智樹・高橋知花の論文を掲載。
- ・ 第 18 回大会 (2024) において、若手ワークショップ『宗教生活のダイナミズム』を実施 (報告者：前野清太郎、内藤幹夫、司会：本多)。
- ・ オンラインジャーナル第 19 巻 (2025) に前野・内藤論文を掲載。
- ・ 第 19 回大会 (2025) に向けて、大会若手 WS を準備。

II. 2025 年度活動計画

- ・ 第 19 回大会 (2025) にて若手ワークショップ「<当事者>の学びづらさを考える：かつてみんな子どもだった」を実施。
- ・ 「<当事者>の学びづらさを考える」の論文化。
- ・ 第 20 回大会 (2026) に向けて若手研究談話会の企画立ち上げと準備に取り組む。

5. 研究談話委員会、関西談話会

- ・ 研究談話委員会は、従来通り、年 4 回程度を目途に学会員からの報告にて企画したい。
- ・ 2025 年 7 月 12 日に第 26 回総合人間学会・関西談話会を実施した。
発表 1：河野勝彦「クリスティン・M・コースガード『鏡に映る動物と向き合う (Facing the Animal You See in the Mirror)』 (報告)
発表 2：木下康光「グリム童話の読み方—『勇ましいちびっこの仕立屋 (KHM20) の場合」

6. 編集委員会 (メール配信より抜粋)

● オンラインジャーナル『総合人間学』第 20 巻、年 2 回発行として準備。

＊ 投稿原稿募集のお知らせ【今回よりエントリー不要】

オンラインジャーナル『総合人間学』第 20 巻への投稿原稿募集に関するご案内です

投稿希望者は、学会サイトの投稿規定・執筆要綱 (2025 年度版) を参照の上、下記のリンクより必要事項を記入・ファイルをアップロードし、送信してください。

[投稿締切日：2025 年 9 月 30 日 (火)]

<https://forms.gle/mYWiCjizDMUuAvE16>

【注】今回よりエントリーは「不要」となりました。

- リンクのフォームより直接投稿原稿を送信してください。
- ・ 投稿の権利は 2025 年度までの年会費を完納している方のみに限らせていただきます。滞納なされている方は投稿を受理できませんのでご注意ください。
 - ・ 論文につきましては査読がございます。
 - ・ 研究ノートは編集委員会による閲読がございます。
 - ・ 原稿は執筆要領にしたがってご作成ください。
 - ・ 雑誌掲載の可否については編集委員会が判定致します。
 - ・ 最新情報は本学会のサイトやニュースレターを通じて公開されます。ご確認ください。
- ご不明な点等ございましたら、下記にご連絡ください
【連絡先】 総合人間学会・編集事務局 / editor@synthetic-anthropology.org

●J-STAGE での学会論文の掲載（公開アクセス）のご案内
「総合人間学」 総合人間学会発行 収録数 22 本（更新日 2025/07/28）
オンラインジャーナル： Online ISSN：2188-1243
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/synanthro/-char/ja>

V. 理事会・運営委員会報告

2025 年度第 1 回理事会・運営委員会

日時 2025 年 6 月 27 日 14 時～16 時 30 分 場所 Zoom

1. 入退会報告

- ・ 入会 2 名

2. 大会振り返り

- ・ 大会運営全般について
- ・ 若手 WS は自分研究（オートエスノグラフィ）をテーマに実施。発表内容は論文化の予定。
- ・ 一般研究報告についてはシンポなどに比べて告知が不十分だったことが反省点。
- ・ シンポ自体は会場の反応は良かったが、スケジュール的な問題もあり準備が不十分だった。従来から問題点として挙げられている点であり改善の必要がある。
- ・ 里山フォーラムも発表は有意義なものだったが、ディスカッションをできればなお良かったが、そのための準備時間の猶予が無かった。
- ・ 里山フォーラムの成果は学会で文字化したい。

3. 学会誌の今後と 20 周年企画、時期大会について

- ・ 書籍版学会誌を従来の方式で継続することは困難で、オンラインジャーナルに統一する方向で考えたい。学会会計がコロナ禍で逼迫。印刷物を刊行し続けることには他学会も困難を抱えており、電子化が進んでいる。
- ・ 19 号は送料込みで出費はおよそ 55 万円。19 号は例外的に売れたが、例年の売上はほぼゼロ。
- ・ 書籍版とオンラインジャーナルとで役割分担し、シンポの内容を書籍版に掲載するというのはここ 10 年ほどのこと。
- ・ 20 周年出版企画については、宮盛理事主導で本の泉社から出版する計画が進行中。宮盛理事が歴代の会長へ協力を相談中。

- ・できるだけオープンな企画として会員の積極的参加を促したい。先行して名誉会長を偲ぶ特別企画の動きもあり、表題から追悼記念という文言を無くすかどうかは慎重な検討を要する。

4. その他

- ・ 理事会・運営委員会のスケジュールについては、年度初めに決めておいたほうが出席が安定して望ましい。予定日の提示とともに、参加確保のため日程伺いも並行して行いたい。
- ・ 今回も事前に予定伺いをしたが、全員参加は難しく、6/27 と 7/12 の近接開催となった。
- ・ 役員改選などの準備作業などは、日程を早期に予定したい。
- ・ 大会の会計報告は 8 月以降に。
- ・ 次回大会テーマ案としては、総合人間学会の歴史総括、前回テーマ（里山）の継承、暴力、戦争/平和などが提案された。

2025 年度第 2 回理事会・運営委員会

日時 2025 年 7 月 12 日 14 時～16 時 30 分 場所 Zoom

1. 入退会報告

- ・ 退会 2 名

2. 学会誌について

- ・ 書籍版が学会の財政を圧迫していること、(特に若手にとって)業績としてはオンラインのほうが魅力的だとの意見もあり、オンラインジャーナルに一本化しても良いのではないかと声が出た。その一方で、書籍版を出すことの宣伝効果も考慮する必要がある、書籍版を廃止するのであればその場合の展望・予算の見通しを検討する必要があるといった指摘もなされた。
- ・ 学会員に書籍版が出なくなることの丁寧な説明が必要であり、出版に当てられていた約 50 万円の予算をどのように割り振るかも検討しておく必要がある。さしあたり、これまでボランティアで担当していただいていた各種実務の担当者への今後の報酬に当てることや、不定期の刊行物出版費用に充てることが考えられる。
- ・ 書籍版を長期的にどうするかについては、きちんと理事会で編集委員長を交えて決定する必要があるが、第 20 号についてはスケジュールや執筆者の意向もあり、オンラインジャーナルとして出すことが確認された。この点については、編集委員長の合意が得られた。
- ・ オンラインジャーナルに統合することで、ただでさえ大きい編集委員の負担がさらに増大しないよう、編集委員の増員が望ましい。編集委員で候補を探して理事会で承認を得る方向で進める。

3. 次回大会について

- ・ 来年度は桜美林大学で開催する場合、教室使用料がかからないので開催校の候補（ただし、テーマとの兼ね合い等で他によりよい開催校があれば検討調整）。
- ・ 里山テーマを継承するのであれば、農工大関係者の協力を仰いでどうかとの提案がなされた。
- ・ その他のテーマ候補として、まなびへの関心、生き辛さ（望んでいることと実際の行動のギャップ、何かに取り組みたいと思う一方で自由や人間らしさが失われていくこと等）、生権力など。
- ・ 大会テーマについて、夏休みを念頭に自由懇談会（オンライン）を企画して、出来れば素案を準備したい（会長）。

4. 今後の体制などについて

- ・ 研究大会では、一般研究発表が新規会員獲得と結びついていたはずだがその経路が途絶えている。

専任講師や助教、准教授といった中堅・若手会員が少ないという構造上の問題が存在。

- ・投稿論文が「総合人間学的でない」などの理由でリジェクトされることで離れていく会員が存在しており、編集方針について編集委員長を交えて検討することが望ましい。ただし、編集方針については編集委員ごとに考えがあり、査読の守秘義務なども関係している点を考慮する必要がある。
- ・学会刷新のためのワーキンググループ立ち上げという提案に対しては、メンバー候補として名前を挙げられた若手会員の負担が返って増大するのではないかという懸念が示された。
- ・理事会を欠席した理事に、会議の内容を（NL よりも早め、こまめに）伝えることが望ましい。
- ・委員会報告については、委員長が出席できない場合には事前にレポート提出を求めるほうがよいとの意見が出された。
- ・事務局が行う発送などの単純作業については、若手に限定せず、近隣在住のベテランにも積極的に呼びかけるよう提案がなされた。
- ・里山フォーラムも発表は有意義なものだったが、ディスカッションをできればなお良かったが、そのための準備時間の猶予が無かった。
- ・里山フォーラムの成果は学会で文字化、オンラインジャーナル掲載に向けて準備する。

VI. 決算・予算資料など

1. 2024 年度決算資料

2024年度決算(報告)期間 2024年4月1日～2025年3月31日

収入の部	2024年度決算	予算	2023年度決算
年会費	1,309,000	977,000	977,000
今年度・一般会員(満額会費対象者)	644,000	546,000	546,000
今年度・一般会員(減額会費適用者)	68,000	64,000	64,000
他年度年会費	597,000	367,000	367,000
寄付金・特別講演会収集会金(大会除く)	0	0	0
書籍売上	20,000	10,000	0
利息	29	0	0
大会関連収入	233,359	0	0
収入合計	1,562,388	987,000	977,000
支出の部	2024年度決算	予算	2023年度決算
大会運営費	198,376	180,000	20,700
年会費等振込手数料・引出手数料 他	6,350	0	3,720
理事会・運営委員会活動費	0	0	0
会議代(湯茶代など)	0	0	0
その他(会場代・文具代など)	0	0	0
研究・談話委員会活動費	0	0	0
研究会・談話会開催費(講師謝金など)	0	0	0
郵送費(談話会案内はがきなど)	0	0	0
その他(会場代・文具代など)	0	0	0
若手委員会活動費	0	0	0
交通費	0	0	0
その他(会場代など)	0	0	0
広報委員会活動費	0	0	0
チラシ発注費	0	0	0
その他	0	0	0

事務局活動費	333,461	241,500	237,504
事務用品・消耗品費	951	3,000	0
郵送費・配送代	48,510	55,000	54,284
印刷費（NL・大会予稿集など）	0	0	0
その他（封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等）	0	3,500	3,220
交通費	0	0	0
事務局幹事報酬	270,000	180,000	180,000
会員発送作業アルバイト代	14,000	0	0
その他（会議室代など）	0	0	0
編集委員会活動費	137,093	128,000	127,731
オンラインジャーナル維持管理費	9,093	8,000	7,731
郵送費・コピー代	0	0	0
編集幹事報酬	120,000	120,000	120,000
J-STAGE登録・更新手続き等アルバイト代	3,000	0	0
英文校正料	5,000	0	0
学会誌支払（出版費用、送料）	525,358	510,000	550,000
ZOOM有料ライセンス	22,110	24,000	21,376
会員管理システム維持費	143,440	150,000	143,908
若手奨励賞副賞費	0	0	0
学会基金積立金	0	0	0
学術誌積立金	0	0	0
雑損	46,856	0	0
予備費	0	0	0
支出合計	1,413,044	1,233,500	1,104,939

（次年度への繰越額） 収入合計 － 支出合計 ＝ 149,344 円

総合人間学会 2024年度決算（収入・支出・繰越）について、以上のように報告致します。

2025年4月17日
総合人間学会事務局長

熊坂 元大

上記報告について、監査の結果、適正であることを認めます。

2025年4月17日
総合人間学会 監事
総合人間学会 監事

岩瀬 敏昭

柳沢 遊

2. 学会資産資料

2024年度末 学会資産		
	銀行（所在地）	金 額
預貯金等	郵ちょ振替口座 （世田谷上馬支店）	1,855,804
	郵ちょ総合口座 （世田谷上馬支店）	55,003
	払出現金	2,234
	小計	1,913,041

流動資産	2023年度末残高	1,252,657
	2024年度繰越金	149,344
	合計	1,402,001
積立金	①学会基金	211,040
	②学術誌積立金	300,000
	小計	511,040
学会資産	計	1,913,041

3. 2025 年度予算資料

2025年度予算(案) 期間 2025年4月1日～2026年3月31日

収入の部	2024年度決算	予算
年会費	1,309,000	1,068,000
今年度・一般会員(満額会費対象者)	644,000	700,000
今年度・一般会員(減額会費適用者)	68,000	68,000
他年度年会費	597,000	300,000
寄付金・特別講演会収集金(大会除く)	0	0
書籍売上	20,000	20,000
利息	29	0
大会関連収入	233,359	180,000
収入合計	1,562,388	1,268,000
支出の部	2024年度決算	予算
大会運営費	198,376	180,000
年会費等振込手数料・引出手数料 他	6,350	5,000
理事会・運営委員会活動費	0	0
会議代(湯茶代など)	0	0
その他(会場代・文具代など)	0	0
研究・談話委員会活動費	0	0
研究会・談話会開催費(講師謝金など)	0	0
郵送費(談話会案内はがきなど)	0	0
その他(会場代・文具代など)	0	0
若手委員会活動費	0	0
交通費	0	0
その他(会場代など)	0	0
広報委員会活動費	0	0
チラシ発注費	0	0
その他	0	0
事務局活動費	333,461	293,000
事務用品・消耗品費	951	3,000
郵送費・配送代	48,510	50,000
印刷費(NL・大会予稿集など)	0	0
その他(封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等)	0	0
交通費	0	0
事務局幹事報酬	270,000	240,000
会員発送作業アルバイト代	14,000	0
その他(会議室代など)	0	0
編集委員会活動費	137,093	150,000
オンラインジャーナル維持管理費	9,093	10,000
郵送費・コピー代	0	0
編集幹事報酬	120,000	120,000
J-STAGE登録・更新手続き等アルバイト代	3,000	15,000
英文校正料	5,000	5,000
学会誌支払(出版費用、送料)	525,358	530,000
ZOOM有料ライセンス	22,110	23,000
会員管理システム維持費	143,440	150,000
若手奨励賞副賞費	0	0
学術誌積立金	0	0
雑損	46,856	0
予備費	0	0
支出合計	1,413,044	1,331,000

(次年度への繰越額) 収入合計 - 支出合計 =

149,344

△ 63,000

VII. 事務局からのお知らせ

- 1) Newsletter のメール配信について：Newsletter は、41 号から郵送事務と経費削減のために、電子メール登録のある会員の皆さまには、電子メールによる配信をさせていただくこととなりました。
Newsletter の発行にあわせて、学会ホームページ（HP）に、Newsletter が配信された旨告知し、会員の皆さまに電子メールでの着信をご確認いただくことといたしました。お使いのメールによって、迷惑メール等へ振り分けされるケースがありますので、見落としされませんようご注意ください。学会からのメール配信で不着信につきましては、学会事務局までご一報ください。
- 2) 会費納入状況などの確認は、学会の HP の「会員限定」のところにあり、「会員用マイページ」へのアクセスで、各個人限定の閲覧にてご確認ください。
会員限定のマイページにアクセスする際は、年誌とともにお送りしている請求書に記載されている ID とパスワードをご利用ください。基本的に事務局にて慎重に管理していますので、メールアドレスや連絡先の変更などは、事務局にご一報ください。
- 3) 会員の皆さまへの会費納入の案内は、書籍版・機関誌の発送時にて、「宛名ラベル」での会費告知と振替用紙の同封の送付の際にて、行わせて頂くこととなりました。ご理解、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。
- 4) 学会誌・書籍（普及ブック）版のご活用について、学会活動の貴重な成果が掲載されておりますので、ゼミ演習等でのテキスト利用など、ぜひご活用と、ご協力頂きますようお願い申し上げます。
★学会書籍：ご注文、とくに複数冊購入希望の方は、学会事務局にご相談ください。
http://synthetic-anthropology.org/?page_id=50
- 5) 年度内の今後の運営委員会・理事会の日程は現在調整中です。会議開催は理事メール宛としてご案内いたします。9 月下旬/10 月上旬、11 月下旬/12 月、2 月、4 月を想定しております。

（事務連絡）

<< 学会費の納入お願い >>

* 総合人間学会・年会費、昨年度（2024 年度）の振り込みがまだの方は、今年度と合わせてお振り込み下さい。学会誌（書籍版）送付時に振り込み用紙を同封、見当たらない方は郵便局の振込用紙にてお願いします。（過去年度未納・滞納の会員の方は、早急にご対応のほど宜しくお願い申し上げます）

● 会計年度としては、4 月からは 2025 年度となりますので、2025 年度の学会費につきまして、早めの納入をお願いいたします。第 19 回研究大会後に、学会誌『総合人間学 19』の刊行・送付をしていますので、同封の振込用紙をご利用ください。

学会費：一般：7,000 円・減額：4,000 円（減額は申請者のみ：学生や非常勤職などへの配慮）

・加入者名：総合人間学会 口座記号番号：00180-2-579072

① 郵便局そなえつけの振替用紙、② ATM 送金、③ 電子振込み、に対応しています。

◆ひろく学会員の門戸を開いておりますので、ご関心の方々にぜひ入会をお勧めください。

学会 HP（入会案内）参照：http://synthetic-anthropology.org/?page_id=5